

## 撤退問題に関する官邸関係者の発言

撤退問題に関して官邸関係者の公表された主要な発言の抜粋を参考として示す。

|                   |                           |         |          |
|-------------------|---------------------------|---------|----------|
| <発言抜粋 1>海江田経済産業大臣 | : 国会・事故調査委員会 <sup>1</sup> | 平成 24 年 | 5 月 17 日 |
| <発言抜粋 2>枝野官房長官    | : 国会・事故調査委員会              | 平成 24 年 | 5 月 27 日 |
| <発言抜粋 3>菅総理大臣     | : 参議院予算委員会                | 平成 23 年 | 4 月 18 日 |
| <発言抜粋 4>菅総理大臣     | : 参議院予算委員会                | 平成 23 年 | 4 月 25 日 |
| <発言抜粋 5>菅総理大臣     | : 参議院予算委員会                | 平成 23 年 | 5 月 2 日  |
| <発言抜粋 6>菅総理大臣     | : 朝日新聞インタビュー              | 平成 23 年 | 9 月 5 日  |
| <発言抜粋 7>菅総理大臣     | : 国会事故調査委員会               | 平成 24 年 | 5 月 28 日 |
| <発言抜粋 8>枝野経済産業大臣  | : 参議院予算委員会                | 平成 24 年 | 2 月 7 日  |

---

<sup>1</sup> 国会 東京電力福島原子力発電所事故調査委員会：福島原子力発電所事故に係る経緯・原因の究明を行うこと等を目的として国会に設置された機関

平成24年5月17日 国会・事故調査委員会答弁抜粋（海江田大臣）

○質問、●答弁

【清水社長からの官邸への電話連絡に関する質疑応答】

- 撤退問題について当時の大臣の方にはどんな形でどこから話があったんでしょうか？
- （略）清水社長から電話ですとあって秘書官の電話に清水社長から電話が掛かってまいりました。（中略）私がしっかりと覚えておりますワードは三つございまして、**第一発電所から第二発電所に、撤退という言葉ではありませんで、退避という言葉がございました。**この三つの言葉ははっきりと覚えております。それ以外に、一部を残して**一部をとかいうような話は一切なかった**と記憶をしております。
- 逆の聞き方で伺いますと、全員がという説明はあったんでしょうか？
- **全員がということは言葉として覚えておりませんが、私は当然頭の中で全員がという認識をいたしましたので、**（略）
- 直接電話に出られたのは海江田大臣以外にありましようか、清水社長等と話された人？
- 私は、受けましたら、後で聞きますと枝野さんのところにも電話が掛かってきたというふうには、これはその場に居合わせたわけでもありませんので、直接見聞きをしたということ、電話が掛かってくるのを見ていた、あるいはそばで聞いていたということではありませんが、**枝野官房長官のところにも掛かっていたふうにその後仄聞**をいたしました。
- その問題は、結局、その場におられた官邸の幹部の方々はどういう結論に達したんでしょうか？
- （略）それは現場の方たちに大変申し訳ないけれども頑張っていたただかなければいけないというふうに、これは**みんながそういう一致**をいたしました。**意思一致**をいたしました。
- 東電側は、いわゆる全員が第一発電所からいなくなると、つまり退避でも撤退でもよろしいんですが、そういうことは考えたこともなく、あるいはそういうことを官邸側に伝えたこともないという説明をされていますが、どう思われますか？
- やっぱり清水さんが電話をしてきたということの意味を考えると、私はそれは大事な結論だったのではないかなというふうに思います。（中略）**私にまでわざわざ電話を掛けてくるということは、それはやっぱり重い決断がその後ろにあったのではないだろうかというふうに思いました。**

【官邸での清水社長の真意確認に関する質疑応答】

- その結果、どういう対応をその後取られました？
- 東京電力の**清水社長にお越しをいただくということ**と、同時に、やはりそういう情報の共有ができていない、それからこちらの意思、向こうの意思、伝達が同時でないということがありますので、その結果、とにかく東京電力に行こうと、そこで**統合本部をつくろうということ**になったわけでありまして。

- 清水社長は、ごく簡単というか、撤退しないということを言われましたね。それについてどう感じられましたか？
- 私はそのときに、若干気が抜けました。それは、大変やっぱりこれは重い決断でありますので、特にやっぱり残る場合は急性被曝なんかの可能性もありますので、そういうことを考えたときにどうなのかなというふうに、**私が電話で受け取った話と違いますので、それはちょっとびっくりしました。**

平成24年5月27日 国会・事故調査委員会答弁抜粋（枝野官房長官）

○質問、●答弁

【清水社長から官邸への電話連絡に関する質疑応答】

- 東電側の意向を知ったのはどのようなきっかけからでしょうか？
- その日の夕方から夜にかけてどこかで呼ばれたという記憶は明確にあります。（略）**東電の社長から全面撤退をしたいという話があって、そんな話ないよねという話で、だめだと言っているんだというような趣旨のことの報告を受けました。**
- それは、どなたが報告されましたか？
- 可能性があるのは、海江田さんか福山さんか細野さんか、そのどなたかだと思います。
- 東電の方から直接その話をどなたからか聞かれたことはありますか？
- （略）**社長から全面撤退の趣旨のお話がありました。**
- （略）これは、**正確な言葉のやりとりまでは覚えておりません。**ただ、そんなことしたらコントロールできなくて、どんどん事態が悪化をしていってとめようがなくなるじゃないですかというような趣旨のことを私の方から指摘しています。それに対して、口ごもったというか、お答えでしたので、**部分的に残すという趣旨でなかったのは明確**です。

【吉田所長の意志確認に関する質疑応答】

- 吉田所長の方にどなたかが直接確認はされておりましたでしょうか？
- （略）私からまだやれることはありますかという趣旨のことをお尋ねして、**まだやれることはあります、頑張りますという趣旨のお話を吉田所長からいただいています。**

《国会答弁》平成23年4月18日 参議院予算委員会答弁（菅総理）

－ 東電との統合本部を作った経緯について問われ －

【清水社長から官邸への電話連絡】

- ここはしっかり国民の皆さんにもお伝えしなきゃいけないので、経緯を申し上げますと、15日の早い時間に東電の関係者から、私には大臣からですが、現地から退避をするといったようなことが伝わってきまして、

【官邸での清水社長の真意確認】

- そこで清水社長に来ていただいて、そのことについて、これは大変重大なことですので、社長におでましをいただいて話を聞きました。そしたら社長は、いやいや、別に撤退という意味ではないんだと言うことを言われました。
- そこで、これまでの段階で、やはり本部が官邸にあって、本部と東電本店、そして本店と現地の情報の中で、なかなか状況が、例えば水素爆発が起きてもすぐには伝わってこないといったことがありましたので、そうしたことを解消するためにも政府と東電との間で合同の対策本部を設けることが私は大変重要だと考え、清水社長にもそのことを申し上げ、清水社長も了解を頂いて、そしてそれを設置したわけです。

【当社本店での総理】

- そして、私が出席をしたのは、その最初の会議を東電本店でやることにいたしまして、そこに出かけたのが最初であります。

《国会答弁》平成23年4月25日 参議院予算委員会答弁（菅総理）

－ 東電との統合本部を作った経緯について問われ －

【清水社長から官邸への電話連絡】

- この問題だけは、きちんと説明しないとなかなかご理解いただけないんです。つまり、15日の段階で少なくとも私のところに大臣から報告があったのは、東電がいろいろな線量の関係で引き上げたいという話があったので、

【官邸での清水社長の真意確認】

- それで社長にまず来て頂いて、どうなんですか、とても引き上げられても困るじゃないですかと言ったら、いやいやそういうことではありませんと言って。
- そこで、やはりどうしても官邸にある原子力災害対策本部と、そして東電の本店と、そして福島第一原子力発電所と三段階になっておりますので、そこで、少なくとも東電と内閣の方は統合的な対策本部をつくりたいけどいかがですかと言ったら社長の方も了解をいただきましたので、

【当社本店での総理】

- それでその対策本部をまず立ち上げて、その一回目の会合をどこでやろうかとしたときに、そのときに、東電の本社には全ての情報集まっていますし、会長、社長を始めおられますので、そこで東電の中に統合対策本部を設けて、その一回目の会合に私は出かけたわけです。

《国会答弁》平成23年5月2日 参議院予算委員会答弁（菅総理）

－ 東電に総理が乗り込んだことについて問われ －

【清水社長から官邸への電話連絡】

- 私が東電に出かけたことを何か問題のように言われましたけれども、原子力災害対策本部そのもの発災の当日に官邸に設けられて、私が本部長をし、そこに東電関係者あるいは安全・保安院あるいは原子力安全委員会の主要メンバーもお集まりをいただいてやっておりました。しかし、ある段階で経産大臣の方から、どうも東電がいろいろな状況で撤退を考えているようだということが私に伝えられたものですから、

【官邸での清水社長の真意確認】

- 社長をお招きしてどうなんだと言ったら、いやいや、そういうつもりではないけれどもという話でありました。

【当社本店での総理】

- 私は、福島的第一、第二だけで十個の原発があり、使用済燃料のプールが合わせて十一存在する中で、ここは何としても踏ん張ってもらわなければならない、こう考えまして統合対策本部というものを立ち上げ、そして現地のことが一番伝わっているのは東電の本社というか本店、そこには全部オンラインでつながっていますので、そういうところにその統合対策本部を設けて一回目の会合に私自身も出かけたということでありまして、私はそのことが、その後のもう撤退というようなことが一切あり得ないというその覚悟にもつながったのではないかと。いろいろご批判があるかもしれませんが、私はこのことはやるべきであったし、やってよかったと今でも思っております。

《朝日新聞社インタビュー》平成23年9月5日 (菅総理)

— 東電が撤退するという話があったのは本当かを問われ —

**【清水社長から官邸への電話連絡】**

- 経産大臣から午前3時ごろ、東電から撤退したいという話があった。撤退したらどうなるのか。放置すれば全部がメルトダウンし、チェルノブイリどころではなくなる。私の頭に『撤退』という文字はなかった。命がけでどうやって抑えこめるかどうかだった

**【官邸での清水社長の真意確認】**

- そして、東電の清水正孝社長を呼んだ。撤退しないのかするのかはっきりしない。
- これでは危ない、グリップをしないとだめだ、と思った。政府と東電の合同の事故対策統合本部の設置を清水社長に提案し、『わかりました』ということになった。



平成24年5月28日 国会・事故調査委員会答弁抜粋 (菅総理)

○質問、●答弁

【清水社長から官邸への電話連絡に関する質疑応答】

- 東電はどのようなことを申し出てきたというふうに、どなたから報告があったんでしょうか？
- 十五日の午前三時ごろだったと思います。(略) 経産大臣から相談があるということで秘書官から起こされたというか、連絡がありました。そこで、海江田経産大臣が来られて、東電から、撤退したいと、そういう話 coming、どうしようかと、そういう形で撤退の話を聞きました。
- それについて、どのように思われ、どのように受け止められましたか？
- (略) 経産大臣からその話があったときに、撤退という言葉聞いて、いや、とんでもないことだと、まずそう感じました。

【吉田所長の意志確認に関する質疑応答】

- 吉田所長が現場で指揮を執っている東電として、全員が撤退するあるいは撤退するようなことを申し出るということについてはどのように思われました？
- (略) そのときは、吉田所長はまだやれるというお話でした。(略)

【官邸での清水社長の真意確認に関する質疑応答】

- 清水社長を呼ばれまして、清水社長はいわゆる撤退問題についてどのような返答をしておられましたでしょうか？
- 私の方から清水社長に対して、撤退はありませんよということを申し上げました。それに対して清水社長は、はい、分かりました、そういうふうに答えられました。
- その回答を聞いて、当時、総理としてはどのように思われました？
- まず、この回答について、勝俣会長などが清水社長が撤退しないと行ったんだということを言われていますが、少なくとも私の前で自らが言われたことはありません。私が撤退はあり得ませんよと言ったときに、はい、分かりましたと言われただけであります。
- 国会での質疑も取り上げられておりますけれども、基本的には、私が撤退はありませんよと言ったときに、そんなことは言っていないとか、そんなことを私は申し上げたつもりはありませんとかという、そういう反論は一切なくてそのまま受け入れられたものですから、そのまま受け入れられたということを国会で申し上げたことを、何か清水社長の方から撤退はないと言ったということに少しこの話が変わっておりますが、そういうことではありません。
- 私としては、清水社長が分かりましたと言ってくれたことは、一つはほっといたしました。しかし、それでは十分ではないと思いました。そこで、併せて私の方から、統合対策本部をつくりたい、そしてそれは東電の本店に置きたい、細野補佐官を常駐させる、あるいは海江田大臣にもできるだけ常駐してもらおう、そういう形で、私が本部長で、海江田大臣と、

そのときはたしか勝俣会長と申し上げたつもりですが、会長か社長と海江田大臣が副本部長、事務局長に細野補佐官、そういう形でやりたいということを申し上げて、清水社長が分かりましたと了承していただきました。

- 清水社長が来られて、撤退ないよねという話でしたら、はい、分かりますと言うんでほっとしたということでもよろしいですよ？
- ほっとというのは、先ほど申し上げましたが、少なくとも、もし、いや、そうじゃないと言われれば、私としてはより強く、いや、それは大変かもしれないけどと、その後、東電で話したようなことをもっと言わなければならなかったかもしれませんが、**ある意味で素直にというか、すぐにというか、言われましたので、ちょっと拍子抜けといいたまうか、ちょっとほっとしたということです。**

#### 【東電本店での総理発言に関する質疑応答】

- 総理はあの十五日の朝に東京電力本店に行かれて、それで多くの方々の証言では叱責をされたということなんですけれども（略）？
- （略）直前に撤退という話があったことは、**それを清水社長に撤退はありませんよと言った直後でありますから、まだ皆さんがそのことで意志一致されているかどうか分かりませんでしたので**、何とか、一番厳しい状況は皆さんが分かっておられるだろうと、だから本当にこれは命を懸けても頑張ってもらいたいという、そういうことを強くは言いました。（略）

《国会答弁》平成24年2月7日 参議院予算委員会答弁（枝野経済産業大臣（答弁当時））

質問；東電に対して、原発の従業員の民間人に対して撤退するなというふうに報じられておりますし、本人もインタビューその他で言っているように思いますが、これ、何の法的根拠があるんですか。

【清水社長の真意確認】

●当時、菅総理は東京電力の清水社長を官邸に呼びまして、**撤退するつもりであるのかを尋ねたところ、清水社長はそんなことは考えていませんと明確に否定をした**と承知しているところでございます。

【当社本店での総理】

●その後、菅当時の総理は東京電力においてお話をされたものと思いますが、これは何か命令とか指示とかではなくて、政府としての東京電力あるいは東京電力職員に対する要請行為でございますので、何らかの法的根拠を要するものではございません。